

# 『宝物集』成立考

——「能恵法師説話」と「第八門〈観念〉」を手がかりに——

東 宇 量

## 一 はじめに

平康頼が書いたとされる『宝物集』には異本が多く、最も早い成立であると考えられる「宮内庁書陵部蔵本（以下、一卷本と略す）」をはじめ、二巻本、三巻本、六巻本、七巻本、九冊本等様々な伝本が存在する。こうした伝本の系統に関する研究はこれまで多くの研究者によってなされてきたが、中でも小泉弘氏の研究は、多数の諸本を詳細に比較考察し、七つの系統に整理され、研究史の画期をなすものとなっている。特に「吉田本」、「瑞光寺本」、「吉川本」等の「七巻本」の考察から、「第二種七巻本（以下、七巻本と略す）」は「一卷本」の改稿本であるとして、作者も康頼であり、和歌の出典から『千載集』撰進以前—文治四年（一一八八）以前—としている<sup>1)</sup>。この研究成果は以後の『宝物集』研究に大きな影響を及ぼし出発点となった。その後、この研究成果を前提として系統論を展開した研究者に山田昭全氏がいる。山田氏は、小泉氏が整理された「一卷本」、「片仮名古活字三巻本（以下、片活三本と略す）」、「七巻本」

の三系統に注目され、「一卷本」「片活三本」「七巻本」の順序で成立し、三伝本とも著者は平康頼であると論じた<sup>2)</sup>。しかし、小泉・山田両氏の間では「片活三本」と「七巻本」の成立の先後や、著者が平康頼であるのか否かについては、見解を異にしている。そこで小稿では、「片活三本」と「七巻本」に語られる「能恵法師説話」と十二門開示中の「観念」の章段に着目し、両本の記述内容を比較検討し、当時の思想・信仰等も考慮しながらその成立時期を考察する。

## 二 「能恵法師」説話について

『宝物集』ではどの系統本でも後半の構成は成仏する方法として、まず浄土に往生できる十二の取り組み方を開示している。それぞれが第一門から第十二門として開示された後、各門の章段で例話を挙げながら説明していく。今回最初に取り上げるのは、「一卷本」では第二門、「片活三本」、「七巻本」では第五門、「発願」の章段に出てくる「能恵法師説話」である。作者にとって近い時期の出

表I

「一卷本」	「片活三本」	「七卷本」
<p><sup>A</sup>チカウハ東大寺之能恵得業大般若供養スヘキ願アリトテヨミカヘリテ侍シハタレモオホヘタマフラムモノヲ般若第一教此經結縁者雖有重業障必當得解脫コノ文コソハ炎广王ノノタマヒケルトテ<sup>a</sup>ソノコロヒト京ニノ、シリ侍シカ願力カヤウニ侍ッハヤク佛ニナラムト願ヲ發給ヘシ</p>	<p><sup>B</sup>近キニハ、東大寺ノ華嚴宗の能恵「得」業ノ願力ニヨリテ、ヨミガヘリ、大般若供養シテ程ナクウセケルコソ、世中ノ人ノ哀レト侍リシカ。 般若第一教 此經結縁者 雖有重業障 必當得解脫 ト此文ヲバ閻魔王ノ誦シ給ヒシケルトテ、 <sup>b</sup>「京ノ人、其比皆口付テ侍リシ文也。」</p>	<p><sup>C</sup>むげにちかくの事には侍らずや、東大寺華嚴宗能恵得業と申しし人、大般若書写し、供養すべき願ありて、営みありきしほどに、やまひづきてうせにき。閻魔王宮にて、この願あるよしを申しければ、「すみやかにへりて願をとぐべし」とて、よみがへりて、大般若書写供養して、ほどなくうせ侍りにき。 般若第一教 此經結縁者 雖<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>重業障<sup>一</sup> 必當<sup>レ</sup>得<sup>三</sup>解脫<sup>一</sup> この文こそは、閻魔王の誦し給ひける文とて、。そのころ一京の人の書き持ちて侍りし文よ。</p>

来事だつたらしく、三伝本共に近い時期であることを書いています。特に「一卷本」ではあまり取り上げていない最近の出来事である。と、千葉照源氏や美濃部重克氏<sup>(4)</sup>は指摘している。そこで「片活三本」、「七卷本」に加えて、「一卷本」の内容も合わせて記し、考察を加える。

右の表Iから分かるように、「七卷本」になると「一卷本」、「片活三本」に比べて内容が多い。「一卷本」では能恵法師が蘇ったことのみで再び没したことが書かれていない。したがって巻数が増えるにつれ詳述されたと考えられる。ここで注目すべきは「一卷本」で「チカウハ」(傍線部A)、「片活三本」で「近キニハ」(傍線部B)とあるのに対して、「七卷本」では「むげにちかく」(傍線部C)としている点である。さらに「一卷本」で「ソノコロヒト京ニノ、シ

リ侍シカ」(傍線部a)、「片活三本」で「其比皆口付テ侍リシ文也」(傍線部b)と書かれた箇所を、「七卷本」では「そのころ一京の人の書き持ちて侍りし文よ。」(傍線部c)という内容に書き換えている点である。山田氏の説に従い、『宝物集』が「一卷本」、「片活三本」、「七卷本」の順に同じ作者が増訂してきたとすると次のことが言える。「一卷本」と「片活三本」を写している時期は「能恵法師説話」に対する状況が変わらなかった。つまり説話に出てくる「般若第一教」以下の偈文を声に出して唱えていたのだ。作者はそのことをただ単純に近い時期の出来事として記述した。「七卷本」の、「能恵法師説話」を書く段階に至って世間で変化があったと推察される。というのは、京中の人が「般若第一教 此經結縁者雖有重業障 必當得解脫」の偈文が書かれた紙を持ち歩くようになったと記

しているからである。おそらくこの紙はお守りの様なものだったのだらう。元々口に出して唱えていた偈を紙に書いて持つことでその利益を願ったと思われる。こうした口承から文字になるといいう、「般若第一教」に対する思想信仰の進展の実態が分かる。つまり、「七卷本」執筆時はその変化が起きた直後だったので「むげにちかく」と書き改めたと考えられる。しかしそう推測するには能恵法師自身の出来事やその説話形成が『宝物集』と近い時期だったのか検証しなければならぬ。作者にとつて近い時期というとは幾分感覚的になることは避けられないが、「能恵法師説話」が形成されていく過程について推測する。

「能恵法師説話」についてこれまでの研究史を整理すると、竹居明男氏の論考に諸研究について整理されているので、それを参考とさせて頂く<sup>6)</sup>。竹居氏はまず梅津次郎氏の研究を紹介している。梅津氏は能恵法師が天治二年(一一二五)に生まれ、説話の出来事があつたのは仁安二年(一一六七)で仁安四年(一一六九)に没したことや、一三世紀前半に能恵法師の蘇生譚が世間から注目されていたことを指摘している。そして建長二年(一一五〇)のものと思われる『高山寺聖教目録』に「能恵得業絵」があり、現在の『能恵法師絵詞』との関連は断定できないが、この辺りの年代で成立していたのではないかと結論した<sup>7)</sup>。

一方で近藤喜博氏は『八幡御宣託記宗祐筆』とする一巻の文書の裏書に能恵法師の『大般若経』供養に関する説話があるとして、その全文を紹介した<sup>8)</sup>。その内容については承久四年(一一二二年)二月二十二日に「荒本」から控えたとある。この「荒本」がどのような

なものか不明であるが、その内容について氏は、

右(※筆者注・荒本を指す)に示したものが、能恵絵詞のテキストになったか否かは断定出来ないが、恐らくかう云つた能恵得業傳が、原資料として用いられてゐることは慥かである。梅津氏所説の如く建長二年の成立を指定すると、承久四年はそれより二十八年以前に当り、事情は合つてくる。しかし、更にこれより溯つて蘇生譚として能恵の話は説話として語られてゐたのであつたと見ねばならぬ。

として何らかの能恵法師に関する話が絵巻成立前に流布していた可能性を指摘している。

『八幡愚童訓』乙本では能恵法師説話を引用した次に備後国の覚円という僧侶が『大般若経』供養の願を起こして八幡宮に参拝し、死後に能恵法師説話に書かれた通りの地獄を巡り蘇生した話があり、更に建永元年(一一二〇六)に藤原の氏女が能恵法師の絵詞と思われるものを見て歓喜して『大般若経』供養を行うに話に続く<sup>9)</sup>。その冒頭部分の記述は次の通りである。

藤原の氏女、建永元年の比、能恵得業が有様を書きたる絵をみて、歓喜して『大般若経』供養の願をおこして、(以下略)<sup>10)</sup>

この記述から建永元年(一一二〇六)には能恵法師蘇生譚が文字だけでなく、現在伝わる『能恵法師絵詞』との関連は不明であるが、絵

も流布していたと分かる。

以上竹居氏の論文を整理すると、現存する『能恵法師絵詞』に引用されている説話そのものと直接の関連は不明であるが、その成立前に説話自体は存在しており、建永元年（一二〇六）には何らかの絵詞が存在していたようだ。そして、それ以前に成立したとみられる『宝物集』「一卷本」、「片活三本」、「七巻本」にはいずれの記述にも絵に関することは見られないことから、『能恵法師絵詞』の成立は『宝物集』以後ということはあるまい。先述した、口承から文字になるといって、「般若第一教」に対する思想信仰の進展の後、そう遠くはない頃に『能恵法師絵詞』が成立したことは間違いないであろう。したがって、『宝物集』の「能恵法師説話」は『能恵法師絵詞』成立時期に関わるだけでなく、「般若第一教」の思想信仰の進展（三伝本の微妙な書き換え）を通して、成立の事情なども浮かび上がらせてくれるのではないだろうか。次に三伝本の微妙な書き換えについて考察してみたい。

### 三 『宝物集』の「ちかし」の時間的距離について

先述したように、『宝物集』三伝本の「能恵法師説話」の冒頭には「チカウハ」（一卷本）「近キニハ」（片活三本）「むげにちかく」（七巻本）とあり、「ちかし」という語が用いられている。ここではじめに、「七巻本」に用いられた「ちかし」の用例をすべて抜き出し、その用法を調査してみたい。

① ちかくは、白河院の、野の行幸せさせ給ひけるに、土御門右大臣師房の、和歌の序書給ひて侍こそ、おもしろく侍めれ。  
一〇頁

② 「此国には人を馬になす事侍る也。馬になされ給ふな。近くも商人の来しを、馬になして侍る也」  
二六頁

③ と云ひければ、此事をこまかに習て、近く商人をなしたる馬のありさまを問ふに、  
二六頁

④ ちかくは則長卿宰相、東の方へながされ給ふとて、かくぞよみ給ひける。  
一〇三頁

⑤ 一生過ぎやすし、万事夢のごとし、冥途ちかきにあり、夕の日にたり。  
一四頁

⑥ 是までは、昔の物語なれば、こまかに及び侍らず。ちかくは安元二年なども、あさましく侍りしとぞかし。  
一四頁

⑦ ちかきほどなれば、六波羅の地蔵へぞつねにまいりける。  
一五七頁

⑧ ちかくは、紫式部が虚事をもつて源氏物語をつくりたる罪によりて、地獄におちて苦しみのびがたきよし、人の夢にみえたりとて、歌よみどものよりあひて、一日経かきて、供養しけるは、おぼえ給ふらんものを。  
一八〇頁

⑨ むげにちかくの事にははべらずや、東大寺華嚴宗能恵得業と申

ばえ給ふらんものを。  
二二九頁

しし人、『大般若経』書写し、供養すべき願ありて、営みありき  
ほどに、やまひづきてうせにき。 二五二頁

⑩ 遠所へ行て、病をうけて、二人の子あるがもとへつげやりたる  
に、一人の子はいたる所ちかし、一人の子は居所とをし。 二八八頁

この十箇所の用例で『宝物集』作者が時間的に「ちかく」とした  
のは、①④⑥⑧⑨である。①の白河院が大井川行幸を行ったのは承  
保三年（一〇七六）のことで、この話の直前に醍醐天皇の話があ  
り、それと比べて相対的に近いという意味で使われていると思われ  
る。④の則長卿宰相とは藤原教長（一一〇九〜一一八〇）で、保  
元元年（一一五六）に起きた保元の乱で敗走した後出家し、常陸へ  
流され、応保二年（一一六二）京へ召還された。「東の方へながさ  
れ給ふ」とは、この常陸へ流されたことを指していると思われる。  
若干昔の話に思われるが藤原教長の没年が治承四年（一一八〇）と  
考えられることから『宝物集』「一卷本」成立時には存命か、直近  
まで存命であった人物の話であり、最近の出来事として当時は実感  
できたのではないか。⑥の安元二年は一一七六年で『宝物集』成立  
時期と極めて近い。明確な時期が書かれた「ちかく」という表現で  
作中に安元二年（一一七六）以降のことは無く、冒頭の双林寺へ平  
康頼が身を寄せた治承三年（一一七九）以降に書かれたことと整合  
性がとれる。⑧の紫式部が地獄に堕ちたという部分は『今鏡』に引  
用されており、「歌よみども」以降の部分が最近の出来事であつ  
たと考えられる。この「歌よみども」が一日経を書いて供養した時

期が問題ではあるが、これは元暦二年（一一八五）八月をあまり下  
らない時期と清水宥聖氏が東寺宝菩提院蔵澄憲の『無題表白集』の  
中の一首「故都督三品後家尼上五部大乘経供養」を取り上げ指摘し  
ている。⑨が「能恵法師説話」冒頭となる。

因みに⑨について、「般若第一教」と書かれているが、これと似  
た内容が澄憲の『言泉集』にも書かれているので次に記す。

寶幢幡蓋香花瓊寶衣服種々、供具窮美、極妙盡忠、諸僧讚唄行香  
咒願禮供既訖、王臣大衆歡喜而退。其夜沙門寂照所夢、白三臧  
言、玉花寺空中無數化佛住立説偈云

般若佛母深妙典、於諸經中一最第一

一花一香供養者、定得无上三菩提

時三臧言、此是經中千佛讚、歎供養經卷一功德德、中有誠言不可  
疑惑矣

大般若一百二十七云、若善男子善女人

等於此般若波羅密多至心聽聞、受持讀誦、精勤修學、如理思惟、廣爲有  
情、宣說流布、或復書寫、衆寶嚴飾、以無量種上妙花鬘塗散等香花衣

服瓔珞寶幢幡蓋衆妙珍奇伎樂燈明

盡諸所有一供養恭敬尊重讚嘆、是善男子善女人等決定不復墮於地

獄、傍生鬼界、一必趣無上正等菩提、常見諸佛、恒聞正法、不離善友

引用文中に見る如く「般若第一経」を供養・讚嘆することで地獄へ  
堕ちずに済むということを書いている（傍線部分）。作者とされて  
いる澄憲は大治元年（一一二六）から建仁三年（一一〇三）まで生

きたとされている。『宝物集』と同時期の「般若第一経」の功德を書いた例である。偶然酷似する経文が引用されたのでなく、共通の仏教思想に基づいてのことだと考えられるのでここで紹介した。

さてここまで「七卷本」での「ちかし」の時期を見てきた。時間の感覚については個人差があるのは当然であり、「七卷本」から明確な数字や確証は得られなかった。しかし「七卷本」では極端に昔の話を「ちかし」とは書いていないことが分かる。最も古い出来事は④の藤原教長についての記述で、約二〇年前の出来事と思われる。確かに『宝物集』が紀元前のインドや中国についても扱っているが、だからと言って二〇年前のことが最近だったとは断言できない。しかし教長は「七卷本」を執筆する数年前に没していると考えられる。作者は同時代を生きた人として、教長に起きたことを感覚的に近い出来事だと思つたのかもしれない。そう考えると教長のことを「ちかくは」と書いたことに納得できる。このように「七卷本」の「ちかし」をそれぞれ見ていくと、引用等でなく、作者自身の判断で「ちかし」という単語を使つていたと考えられる。「むげにちかく」としたのも作者が敢えてそう書いた可能性が高まると言えよう。

ところで、⑧については、重要な視点を提供してくれるので言及しておきたい。というのは、この段は「片活三本」と記述が異なるのである。「片活三本」では

マヂカクハ、紫式部ガ夢ニ、「虚言ヲ以テ源氏物語ヲ造シ故  
ニ、地獄ニ墮チ、苦ヲ受タリ」ト見ヘシ故ニ、「早源氏物語ヲ

破リ捨テ、一日経ヲ書テ唱ベシ」ト云ヒケルトテ、歌読ミ共、集テ務ナミアヒタリシ也。

とあり、清水有聖氏によればこの段は『無題表白集』の「故都督三品後家尼上五部大乘経供養表白」のことを指すとされている。そして、その成立は文中の記事内容から元暦二年（一一八五）八月だと考えられ、これを「マヂカク」とした「片活三本」は成立が元暦二年（一一八五）八月に極めて近い時期だとされている。「七卷本」で「マヂカク」から「ちかく」と書き換えられていることから「七卷本」が「片活三本」成立以後に作られたと考えられるのではない。つまり「片活三本」では「マヂカク」という直近の出来事であったのが、「七卷本」では少し時間が経つたので「ちかく」と書き改めたと考えられる。逆に「片活三本」で「近キニハ」として「般若第一教」以下の偈文を唱えていたと書かれていた能恵法師の蘇生譚について、「七卷本」では「むげにちかく」に「そのころ一京の人の書き持ちて侍りし文」として書写し所持していたと書き改めているので、説話形成に変化を及ぼしたと考えられる。「片活三本」の紫式部墮地獄説話の「マヂカクハ」と「七卷本」の「むげにちかく」の書き改められ方は「片活三本」の次に「七卷本」ができたとするので納得できる。もし「七卷本」から先にできた場合、紫式部墮地獄説話については先に成立した「七卷本」で「ちかくは」とあるのに、後から成立した「片活三本」で「マヂカクハ」と同じ出来事について時を経た後に書いて「マヂカク」とすることに違和感がある。そして「能恵法師説話」はさらに不可解になる。「一卷本」

で唱えていた偈文が「七巻本」では紙に書いて持ち運ぶようになり、「三巻本」で再び口で唱えるようになるという不自然な経過を辿ったことになる。

では「片活三本」と「七巻本」がいつ成立したのが問題となるが、『宝物集』の成立年代について美濃部氏の考察では、「一卷本」と「七巻本」で和歌作者の官職が異なる人物がいることに着目し、文治二年（一一八六）一二月以前とした。また和歌の作者に平家に関係する人物が『宝物集』に出ていないことから、平家追討の命が出た寿永二年（一一八三）八月二十八日以降を「七巻本」成立時期とした。まとめると成立時期は寿永二年（一一八三）八月二十八日以後、文治二年（一一八六）一二月以前となる。これは小泉弘説の『千載集』成立前とも近似してくる。ただ「片活三本」成立時期と併せて考え、「片活三本」と「七巻本」が元暦二年（一一八五）八月以後、文治二年（一一八六）年一二月以前に成立したとすると、時間が幾分少ないように思う。

ここまでをまとめると次のことが言える。まず本文を見ると「一卷本」では能恵法師が蘇生するまでは書かれているが再び亡くなったことは書かれていない。巻数が増えるほど内容も詳しく書かれていると言える。また、「一卷本」の記述と「片活三本」の記述では「般若第一教」以下の偈文をその当時京の人が唱えていたことが分かる。それに対して「七巻本」では京の人はその偈を書写し、所持していたとした。それが「七巻本」執筆時にきわめて近い時期であり、それを受けて「むげにちかく」とし作者は書き改めたと考えられる。つまり「能恵法師説話」が書かれた箇所を、「一卷本」、「片

活三本」、「七巻本」の順に成立したなら、「般若第一教」に対する世間の信仰の変遷を理解することができる。もし成立順が前後したとして、「一卷本」で口々に唱え、「七巻本」で文字化して、「片活三本」でまた口々に唱えるという形に逆戻りしたとするならそれは不可解である。ここは「口唱」から「偈文書写所持」と考えるのが自然だろう。また、先程⑧にあった紫式部の墮地獄説話は「片活三本」で「マヂカク」としたのが「七巻本」では「ちかく」とされている。「片活三本」では直近の出来事として、「七巻本」では時間が過ぎて作者の感覚としてはこの間の出来事と捉えるようになったと考えれば、「一卷本」、「三巻本」、「七巻本」の順番で成立が説明できる。実際の成立年代については、先述したように「片活三本」七巻本の成立は元暦二年（一一八五）八月以後、文治二年（一一八六）一二月以前と考えられる。

以上、『宝物集』三伝本に用いられた「ちかし」の用例を抜き出し、その用法を調査して私見を述べてみた。

#### 四十二門「発願」の「成仏」と「往生」について

「能恵法師説話」に関連してもう一つ気になる点がある。それはこの説話が含まれる「一卷本」では第二門、「片活三本」、「七巻本」では第五門の「発願」の章段冒頭や末尾で成仏から往生へ内容が書き換えられている点である。十二門を開示した箇所も含めて次に記す。

表II

発願		十二門開示	「一巻本」	「片活三本」	「七巻本」
冒頭	ハヤク佛ニナラムト願ヲ發給ヘシ。	第二誓願ヲオコシテ佛ニナルヘシト申ハ、	第五二、成仏ト願ヲ起シ	第五二に、淨土ニ往生セント云願ヲ起テ 仏道ナルベシト云ハ、	第五には仏にやらんと願をおこし、
末尾				又、物ヲ願ニ、叶マジキ事ヲダニコソ願 ニ待リヌレ。マシテ往生極樂ヲ願ン、ナン ゾ疑アラン。叶マジキコトヲ願フ人、歌ニ テ申ベシ。 (和歌省略)	第五に、淨土に往生せんと云願をおこし て仏道なるべしと申は、 なをく極樂に往生せんと云願をおこし給 べし。 物をねがふには、かなふまじき事をねが ふ人、おほく待るめり。歌にて申侍るべし。 (和歌省略)

まず表IIの十二門開示を見ると、傍線部には各本全て「成仏」が見受けられる。しかし「発願」の冒頭では「一巻本」の傍線部が引き続き「成仏」を願っているのに対して、「片活三本」や「七巻本」では浄土に「往生」することを願っている。同様に「発願」の末尾でも「一巻本」では「成仏」、「片活三本」や「七巻本」では「往生」になっている。更に末尾では阿弥陀仏の浄土である極樂と明確に書き換えていることから、「片活三本」、「七巻本」では阿弥陀仏の浄土思想からの影響が強いと考えられる。「成仏」とは悟りを開いたり、真理に目覚めることである。「往生」については、特に浄土教では阿弥陀仏の安樂世界に「往生」してから「成仏」とすると考<sup>16)</sup>えるので意味が異なる。特に日本の浄土教に大きな影響を与えた『往生要集』について、末木文美士氏は、「来世浄土への往生ということを目標に定めており、その点で現世での修行から悟りへという

道とは明らかに異なっている」と述べている。<sup>16)</sup>このように「発願」の部分は「能恵法師説話」を含め「一巻本」では一貫して「成仏」を目指したが、「片活三本」や「七巻本」では「往生」を目指す内容へと書き換えられている。山田昭全氏は「七巻本」第五門で引用されている『十住毘婆沙論』、『十疑（浄土十疑論）』『大莊嚴論』の内容は『往生要集』からの孫引きであることを指摘している。<sup>17)</sup>それに従うと『宝物集』は浄土教の中でも特に『往生要集』の影響が強いと考えられる。

『宝物集』には「発願」と同様に、「成仏」から「往生」へと大きく内容が変更された箇所として十二門の第八門「観念」の章段が挙げられる。「一巻本」では現存していない箇所だが、第八門の「観念」の章段は、「発願」章段以上に「浄土教的表現」が徹底されているのである。具体的には「片活三本」の「成仏」が、「七巻本」

では「往生」の表記に書き換えられているのである。次にその書き換えの用例を確認してみたい。

### 五 「成仏」から「往生」の書き換えについて

では次に第八門の「観念」の章段ついて考察したい。次の表Ⅲ傍線部は「七巻本」で浄土思想について書かれた、又は浄土思想に関連する言葉が出て来た部分を上段に抜き出し、下段には、それに該当する「片活三本」のくだりを引用した。

表Ⅲ ※太字は「七巻本」に依る小見出し

「七巻本」	「片活三本」
<p><b>観念</b></p> <p>□ 二八二頁（「観念」冒頭）</p> <p>第八に、観念をこらして仏道を成ずべしと申は、先師みな観念によるが故に、往生淨利の素懐をとげたまへり</p>	<p>一六六頁</p> <p>第八二、観念ヲ凝シテ成仏スト申ハ、諸法ハ観念ニ依ガ故ニ、先師皆観念ヲ用ヒ給ヘリ。</p> <p>三界唯一心 心外無別法 心仏及衆生 是三無差別</p> <p>ト説。「一色一香、無非中道」ト云。是ヲ真如実相ト名ク</p> <p>無し</p>
<p>□ 二八二頁</p> <p>賢き將軍になりぬれば、帷帳の内<small>にふしながら</small>、万里の外の軍に</p>	<p>無し</p>

<p>勝つべき謀をするなり。賢き聖に成ぬれば、十萬億の国を過て、極樂浄土の多ほう正法を観念して、往生極樂の望を成就する也。</p> <p>□ 二八二頁</p> <p>葉草葉樹は耆婆・扁鵲が（眼ノ）前、浄土淨利は観念の掌のうちと云は、是なり。</p>	<p>無し</p>
<p>□ 二八三頁</p> <p>日西にいらば、弥陀来迎して浄土にかへり給光をおもへ。水清くすまば、紺瑠璃の池の映徹せる事を観ぜよ。</p>	<p>無し</p>
<p>□ 二八三頁</p> <p>道珍禪師は池を観じて往生の素懐をとげ、海雲比丘は海にむかつて浄土の因をうへき。</p>	<p>無し</p>
<p>□ 二八三頁</p> <p>この故に、ある時は、弥陀如来、八功德池の中に宝蓮台に座して光明をはなち給ふを観念し、ある時は、観音・勢至の二菩薩とともに大梵和雅の御声をもて法をとき給ふを観じ、ある時は、六十萬億那由多恒河沙由旬の自身を現じ給ひて、眉間の白毫の五の須弥のやうなるを観じ、或時は、宮殿樓閣の</p>	<p>無し</p>

<p>飛行するを觀じ、あるときは、上品蓮台の暎の樂の聲を觀じ、あるときは、鳧雁・鴛鴦の五根五力の法文を囀るを觀ずる時、八十億劫の生死の罪障をのぞく。つゝに安養淨刹に往生するなり。こまかに、觀無量壽經にとけり。是を十六相觀の大意とす。</p>	
<p>〔七〕 二八三頁 ある時(は)、身の中の真如実相を觀じ、あるときは、諸法空寂なる事を觀じ、あるときは、此身の不淨なる事を觀ず。皆、往生極樂の因とならずと云事なし。</p>	無し
<p>〔八〕 二八五頁 しかりといへども、本有常住の月、光をかくして、生死長夜の闇ふかし。四智円明の鏡、塵つもりて、三身万徳の影うかぶ事なきなり。 觀無量壽經には、「三十二相、八十随形の好なる、此心仏になる、この心は仏也」ト云ヒ、 大集經には、「菩提をはなれて一法有事なし。このゆへに心性の仏を觀念すべし」とはをしへ給へるなり。</p>	無し

<p>〔九〕 二八九頁 次に空觀と申は、色即是空の思ひをなして、諸法を空としり、無大無小の觀をいたして、一切有と思はぬなり。 觀<sub>レ</sub>身岸額離<sub>レ</sub>根草 論<sub>レ</sub>命江頭不<sub>レ</sub>繫船</p>	<p>一六八頁 空觀ト申ハ、諸法ハ空也ト觀ジテ、著<sub>ヲ</sub>成ス事ヲセザル也。 觀身岸ノ額ニ離根草 論命江辺ニツナガザル船 生アル者ハ必滅、釈尊未免梅檀ノ煙。樂ミ尽キ悲來、天人尚五衰ノ日ニ相ヘリ。 加之、万法ハ皆是空也ト觀バ、罪モナシ、功徳モナシ、淨土モナシ、地獄モナシ。</p>
<p>〔一〇〕 二九五頁 いはんや、滅罪生善のために、空寂を觀念せん人、あに、往生極樂の因とならざらんや。此事こまかに俱舍十一卷にしるし、委は正法念經にとけり。</p>	無し
<p>不淨觀 〔一一〕 三〇一頁 次に不淨を觀ずべしと申は、我身も人の身も不淨なる事を觀ずるなり。たとへば、絵がける瓶の中にもろくの糞穢を入たるが如しといへる、こまかには横川の僧都の往生要集にしるせり。</p>	<p>一六九頁 不淨觀ト申ハ、我モ人モ、此身ハ始ヨリ終マデ内外不淨也。譬バ、絵ニ書ケル瓶ノ内ニ、糞穢ヲ入タルガ如シ。大海ヲ頂テ洗トモ清ク成事不可有。</p>

<p>〔一〕 三〇二頁</p> <p>誰の心有人か是に着をなして、手とり口すひ床を一にせん。この観念をなすとき、無始生死の罪障消滅して、往生極樂の因を得る物なり。</p>	<p>無し</p>
<p>〔三〕 三〇二頁</p> <p>この故に、恵心僧都は、「此不淨觀ならずは、つねに塚の間にのぞみて、死人の屍をみよ」とはをしへ給へるなり。</p> <p>しかのみならず、観念によるが故に、罪かへりて功德となり、悪変じて善となる事侍り。</p>	<p>無し</p>
<p>〔四〕 三〇二頁</p> <p>少く申侍るべきなり。仙預国王の人をころし、東光梵士姪を行じ、末利夫人の酒をす、めし、皆破戒なりといへども、淨土の因となる也</p>	<p>一七〇頁</p> <p>仙預国王ハ仏説ヲ不用シ故ニ、五百ノ婆羅門ヲ殺シ、東光梵士ハ「我ヲ不犯者、身ヲ投テ死シ」ト云シ下女ヲ犯シキ。末利夫人ハ国王ノ嗔テ人ヲ殺ントセシカバ、酒ヲス、メテ腹ヲスエタリキ。</p> <p>人ヲ殺シ、姪ヲ行ジ、酒ヲス、メ、如此悪業有レドモ観念ニ依ルガ故ニ、此人皆、果ヲ得タリト云ヘリ。</p>
<p>〔五〕 三〇三頁</p> <p>是皆逆罪なりといへども、みな淨</p>	<p>一六九頁</p> <p>是ヲ不淨觀トハ申也。縦ヒ悪業</p>

<p>土の因となりき。智者のつくる罪は、鉢のごとしと云はこれなり。</p> <p>煩惱即菩提 生死即涅槃</p> <p>といひ、</p> <p>姪欲即是道 悲痴亦如是</p> <p>ととくは是なり。</p>	<p>ヲ成ト云ヘドモ、還テ善ト成ルハ、此觀ニ依也。</p> <p>煩惱即菩提 生死即涅槃</p> <p>ト、</p> <p>姪欲即是道 悲痴亦如是</p> <p>ト説。此ヲ以テ、「智者ノ造ル罪ハ鉢ノ如」トハ申也。</p>
<p>〔一六〕 三〇三頁</p> <p>二人の僧、命終の時、聖衆の来迎にあづかりて、往生の相をあらはすといへり。</p>	<p>無し</p>
<p>〔一七〕 三〇五頁（「観念」末尾）</p> <p>若以色見我 以音声求我 是人行邪道 不能见如来</p> <p>是皆観念の大意なり。この故に、観念をいたして、淨土往生したまへとはす、め申侍なり。</p>	<p>一七〇頁</p> <p>若以色見我 以音声求我 是人行邪道 不能见如来</p> <p>此観念ノ心ニテ侍ル。何ニモ観ジ給ベキ也。</p>

右に引用した両伝本を確認すると、「片活三本」の冒頭では「観念」による「成仏」について書かれていることが認められ、また末尾部分ではただ観念することを勧めている。それに対して「七卷本」では、冒頭、末尾、どちらも「観念」による「往生」について述べている。さらに、全体としては小見出しの「観念」と「不淨觀」に淨土思想に関する内容が増訂されていることが分かる。特に「七卷本」冒頭の「往生淨利の素懐」は「かねてからの往生極樂の

願い」という意味があることから、「七卷本」での第八門は「観念」による「往生」についてかなり強調して書く意図があったのかもしれない。浄土思想があまり見られなかった「真如実相」と「空観」を見ると、八は真如実相を、□○については空について述べる中で『観無量寿経』の引用や「空寂を観念せん人、あに、往生極楽の因とならざらんや」と記していることは、「片活三本」に該当部分が無いだけに注目される。つまり増訂が多い部分でのみ浄土教に関する記述を追加したのではなく、第八門の「観念」全体で浄土教について言及し強調したかったのだろう。それは、冒頭と末尾で往生や浄土に言及して照応させていることから分かる。一方、「片活三本」では

第八二、観念ヲ凝シテ成仏スト申ハ、諸法ハ観念ニ依ガ故  
ニ、先師皆観念ヲ用ヒ給ヘリ。

三界唯一心 心外無別法 心仏及衆生 是三無差別

ト説。「一色一香、無非中道」ト云。是ヲ真如実相ト名ク。(一六六頁)

と冒頭にあり、天台教学の中心思想を全面に出している。したがって、仏教思想的には「成仏」に力点を置いた冒頭となっている。それに対して、「七卷本」は「片活三本」の思想を概ね取り込んだ形で、「極楽往生」を強調した内容で増訂されているといえよう。つまり「片活三本」と同様の内容が、「七卷本」では往生できる方法として引用されている。換言するならば、「観念による成仏」を記

しながら、「観念による浄土往生」を勧めている内容に書き換えているのだ。ここに当時の浄土教思想がどのようなものであったかを見ることができよう。当時観念による往生を重視した人物に永観が挙げられ、永観が『宝物集』に対して影響があったと山田昭全氏は指摘している。<sup>(18)</sup>『往生要集』や永観等、当時の浄土教関連の思想信仰を『宝物集』作者が意識していたと想像できる。さらに、『宝物集』成立時期は、法然が大原問答で世に知られる前後と考えられる。永観から法然の間、つまり、法然が世に出てくる少し前の浄土教思想の影響があつて、「七卷本」では「観念による往生」が書かれることになったのではないだろうか。したがって、「片活三本」はその成仏思想から、「七卷本」の後に書かれたということは考え難いといえよう。大場朗氏は「片活三本」では「諸行往生を認める立場で叙述」し、「七卷本」では「専修念仏」による「往生・成仏」を説いていると指摘している。その上でやはり「片活三本」の後に「七卷本」が成立したとすれば、当時の思想信仰の流れである「諸行往生から専修念仏へ」という流れと合致し自然であるとしている<sup>(19)</sup>。したがって、第八門の「観念」の章段の比較検討からも同様の結論、すなわち、「一巻本」、「片活三本」、「七卷本」の成立の順序が妥当だと考えられるのである。

## 五 まとめ

以上小稿をまとめると、まず「発願」の「能恵法師説話」では「むげにちかく」という語句の考察から、当時の「般若第一教」の

思想信仰が、唱える形から紙に書いて所持する形に変化していったことを指摘した。ここには当時の思想信仰の移り変わりが見て取れ、その流れを踏まえると、「二巻本」、「片活三本」、「七巻本」の順に成立していったと考えるのが合理的で自然であるという結論に至った。

次に「能恵法師説話」が含まれている「発願」の章段の冒頭と末尾に注目して考察をすすめたところ、「一巻本」では冒頭や末尾で「成仏」について説いていたが、「片活三本」や「七巻本」では「往生」を説いていることが確認できた。さらに、同様の現象が第八門の「観念」の章段にも認められたので、三伝本を調査すると、「片活三本」が「成仏」について説いているのに対して、「七巻本」では「往生」について説いていることがわかった。以上の考察から、「片活三本」から「七巻本」の書き換えの流れは、当時の思想信仰の流れ、すなわち、「諸行往生から専修念仏へ」という流れと合致していることから、という結論に至った。

以上、「能恵法師説話」の「むげにちかく」という語句の考察と、十二門中の「発願」「観念」の章段の「成仏」と「往生」の表記を手がかりにして、三伝本の成立について私見を述べてみた。

※今回使用した『宝物集』原文は以下の通りである。

「二巻本」 月本直子 月本雅幸 編 『宮内廳書陵部藏本宝物集總索引』〈古典籍索引叢書 第六卷（第一会配本）〉（汲古書院 一九九三年一〇月）

「片活三本」 山田昭全・大場朗・森晴彦 『宝物集』（おうふう 一九

九五年四月）

「七巻本」 小泉弘・山田昭全・小島考之・木下賢一 『宝物集 閑居友 比良山古人靈託』〈新日本古典文学大系40〉（岩波書店 一九九三年一月）

#### 【注】

(1) 小泉弘 『古鈔本宝物集 研究篇（貴重古典籍叢刊）』（小泉弘 角川書店）一九七三年三月

小泉弘氏によると、『宝物集』「一巻本」は平康頼自筆か疑わしいが、漢字や片仮名の書体が古風なことから、康頼の時代をさして下らない頃の写しだろうとしている。

(2) 山田昭全 『山田昭全著作集 第2巻 宝物集研究』（おうふう 二〇一五年一月）

山田氏によれば『宝物集』は江戸時代に「第一種七巻本」が最も出回っており、小泉弘氏が「七巻本」を発見するまでは、平康頼が書いた「一巻本」を江戸時代頃までに徐々に増補することで成立していったと考えられてきた。しかし「七巻本」と「第一種七巻本」を比較したところ、「第一種七巻本」は「片活三本」の上巻と中巻、それ以降を「七巻本」の五巻以降を合わせた内容で書いたとした。つまり「片活三本」と「七巻本」は江戸以前の成立であると考えられる。

(3) 「一巻本」では「佛にナルミチニモ。十二門ヲタテ、申侍ベシ。」とあるが、この十二門を「片活三本」では「浄土ニ可往生ス道ニ」、「七巻本」でも「浄土に往生をすべき道」とあることから、

この時点で成仏と往生という記述の違いが見られる。しかし「二巻本」は第三門途中までしか現存していないことから、「一巻本」では十二門それぞれの記述内容が成仏を重視して書かれたとは断言できない。

- (4) 千葉照源「寶物集成立考」(『國文學踏査』 1号 一九三一年二月) 二五八頁、二五九頁
  - (5) 美濃部重克「『寶物集』の成立時期」(『南山國文論集』 四号) 一九八〇年三月 五五頁
  - (6) 竹居明男「『能恵法師繪卷』とその周辺 — 中世八幡宮をめぐる蘇生譚覚書 —」(『国学院雑誌』 八八卷 一九八七年六月) 二〇五〜二〇九頁
  - (7) 梅津次郎「能恵法師繪詞について」(美術研究大百四号 一九四〇年八月) 二二九〜二三二頁
  - (8) 近藤喜博「繪卷に関する新資料 — 能恵法師傳と春日権現験記抄 —」(『美術史』 二十五号 一九五七年七月) 九、一〇頁
  - (9) 新城敏男「中世八幡信仰の一考察 — 『八幡愚童訓』の成立と性格 —」(『日本歴史』 第三三二号 一九七五年一月) 四三三頁
  - (10) 桜井徳太郎・萩原龍夫・宮田登校 注『寺社縁起』(日本思想体系 20) (岩波書店 一九七五年二月) 二五三頁
  - (11) 小松茂美「彦火々出見尊繪卷の研究」(東京美術 一九七四年一〇月) 一二四〜一四六頁
- 因みに藤原教長は小松茂美氏の指摘では、現在確認されている繪卷の中で最初に画中詞を使用した『彦火々出見尊繪卷』の作者とされている。『能恵法師繪詞』も画中詞が使用されている。

る。この時期の表現の潮流だったか。

- (12) 清水宥聖「源氏一品経供養表白」の成立背景 (『大正大学大学院研究論集』 第二八号 二〇〇四年三月) 四〇、四一頁
  - (13) 永井義憲・清水宥聖 編『安分院唱導集』(角川書店 一九七二年三月) 六八頁
  - (14) (5) と同じ
- 「二巻本」と「七巻本」で官職表記が異なる人物に注目したところ、最も上限を狭くすると寿永元年(一一八二)三月以後、同二年一二月以前となった。しかし官職が書かれた朝臣書は転写に際して誤りが生じやすいこと、注目した人物の中にいた藤原親宗の官職は解官と還任を繰り返していること等から寿永二年一二月に特定できないかもしれないとした。文治二年一〇月、藤原兼定、一一月、実定、一二月、実家、公衡の官職が「七巻本」とは変わることから、文治二年一二月以前であるだろうとした。また、「第二種七巻本」には武官系平氏の歌人が全く登場しないことから、『千載集』でそれらの人物が朝敵であることを考慮して読人不知、としたことと同じく憚られたのではないかとしている。なので後白河院が平家追討の命を出した寿永二年八月二八日以後に「七巻本」が成立したのではないかとしている。
- (15) 『岩波仏教事典 第二版』(岩波書店 二〇〇二年一〇月 第二版)
  - (16) 末木文美士『鎌倉仏教展開論』(トランスビュー 二〇〇八年四月) 一一九頁

- (17) (2) と同じ 二二二頁
- (18) (2) と同じ 二二四頁
- (19) 大場朗『宝物集の研究』(おうふう 二〇一〇年三月)。三〇八頁